



今回のガイド

ほつみつねお
穂積 恒雄さん

東田川文化記念館・館長。福島県出身で、「月山、鳥海山の見事な風景にひかれて」定年を期に夫婦で鶴岡へと移住した。

外は洋、中は和の「お座敷図書館」

庄内地域12の旧町村（現2市3町）を地域の方と巡り、歴史や文化をお伝えしてきた「庄内みどころ再発見」。いよいよ最終回となる今回は、鶴岡市藤島地区の中心部を訪れた。

ガイドの穂積恒雄さんが待つ東田川文化記念館は、「旧東田川郡会議事堂」「旧東田川郡役所」「旧東田川電気事業組合倉庫」の3つの建物から構成される。連日の雪で「旧東田川郡会議事堂」の屋根は真っ白。洋風建築の優美さも手伝って、まるで白亜の宮殿だ。ところが、外観に反して1階の図書館は和室の設えで、広々とした玄関で靴を脱いで入館する。児童書コーナーは畳敷きで、おばあちゃんの家に来たような温かみがある。穂積さんを追って奥へ進むと、応接室へと案内された。「この部屋の見どころは、これです」と指さされたのは…茶色い壁!? 『『金唐革紙』という特別な壁紙です』。そっと手を触れると、型押しした革のようなポコポコとした立体感。

素材は和紙だという。「今では国内の数カ所にしか残されていない、明治初期の素晴らしい職人技です」。館内のスタッフに声を掛ければ、この応接室を見せてもらうことができるそうだ。

文明開化の薫り漂うコンサートホール

階段を上がると、2階は一転してレトロモダンな雰囲気の間。シャンデリアや薄紅色のカーテンといった調度品もエレガントで、まさに明治の洋館そのものの。こんな素敵な場所があったなんて！ ここ「明治ホール」は現役でコンサートや展示会に使われている。「木造だから音の響きが柔らかいですよ」という穂積さんの言葉に思わずうっとり。次の演奏会にはぜひお邪魔したい。

次は、隣の「旧郡役所」へ。この建物の棟梁は致道博物館や善寶寺の五重塔と同じ高橋兼吉。一見すると普通の和風建築だが、中庭を囲むように廊下が巡らされた「回廊式」の構造に、洋の息吹が宿っている。当時のまま



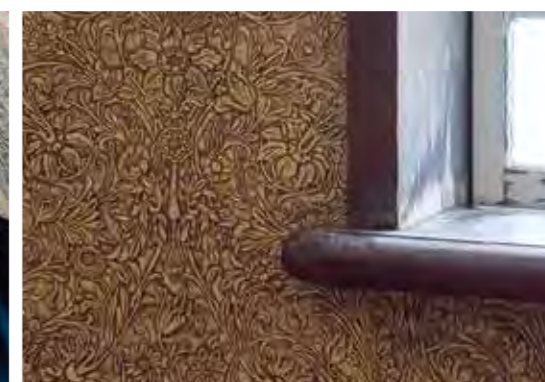
明治19年の火災で焼失し、再建された「旧郡役所」。館内入口には焼失前の郡役所の模型が飾られている。



「旧郡役所」は中庭を挟んで向こうの部屋の様子が見える「回廊式」の造り。



上品でレトロな趣の「明治ホール」に、気分はさながら伯爵令嬢。



Supported by 庄内広域行政組合

第12回 庄内みどころ再発見

ふわふわ藤島 雪町あるまじ、

羽黒山麓から庄内平野に広がる旧藤島町は、中世には城が置かれた要所のひとつ。城址周辺を歩き、その歴史と未来への取り組みに触れてきました。

耳より藤島かわら版

伝統芸能やおまつりなど、
四季を通じて見どころいっぱい!



ふじの花まつり

日本一のふじの里づくりを目指して平成4年から開催。約100鉢のふじの盆栽が勢揃いし、会場周辺の長さ400メートルを超える藤棚もちょうど見頃に。ふじの花の甘い香りに包まれて、ミニコンサートやむかし話語り、呈茶などが楽しめる。
 開5月中旬～下旬
 所藤島体育館周辺
 電☎0235-64-2229
 (ふじの花まつり実行委員会)



気分はイタリア?



つや姫がママに!



土器にドキドキ

四季の里 楽々(らら)

JAS有機栽培米や特別栽培米などのお米を中心に、トマトやじゃがいも、藤島きもど、旬の野菜、加工品など、環境に配慮した地元食材が豊富に並ぶ。
 開9:30~18:00
 所年末年始
 所鶴岡市藤浪二丁目93
 電☎0235-78-2520



純米大吟醸「藤島」

藤島地域で育てられた酒米「出羽燦々」を使い、亀の井酒造が醸造するオリジナル純米酒。3月4日には白藤ドライブインにて新酒試飲会を開催。4月1日から藤島地域の酒販売店にて限定販売される。
 電☎0235-64-2111(藤島庁舎産業課)



獅子踊り

藤島は昔から獅子郷と呼ばれ、勇壮な獅子踊りが数多く伝承されている。室町時代の舞楽に起源を持つとされ、現在でも8月になると地域の祭りで奉納されている。



四阿(あずまや)

添川大森山の頂上(247m)にあり、庄内平野を一望。天気の良い日は海まで眺めることができる。頂上までは林道のため路肩の枝や道路のぬかるみにはご注意ください。

農業文化 発展を下支えする

館内一の見どころは、県指定文化財の独木舟(まなこぶね)。一本の杉の木をくりぬいて作られており、国

に残る藤の生命力に励まされたのかもしれない。
 3つ目の建物は「旧東田川電気事業組合倉庫」。穂積さんが入口に書かれた「東」の文字を指さして「わかりますか? 電柱と稲妻を表しているんですよ」と解説。現在でも通用する洗練されたデザインに、思わず感嘆の声がもれた。藤島地域の歴史が展示されている2階へと向かう。パネルには「藤島」という地名の由来について書かれており、いわく「昔、川が氾濫して一帯が水浸しになった時、藤の木が島のように見えたから」。水浸しの土地を見て落胆した人々は、そこに残る藤の生命力に励まされたのかもしれない。



「旧郡役所」では藁細工の作品も展示している。「米俵を初めて見る子どもも多くて、これ何?って聞かれますよ」

内に現存する独木舟の中では最長となる。「これは日本一の独木舟なんだよって子どもたちに教えると、途端に瞳がキラキラするんですよ。自分の町に『日本一』があるというのは誇りにつながるんですよ」。中世の時代には藤島に城が置かれ、お堀から川を伝って独木舟で荷物を運搬していた様子うかがえる。
 藤島のこうした歴史の背景には、古くからの農業文化の発達があった。稲作適地として知られ、現在も地域内に米の研究機関、山形県農業総合研究センター水田農業試験場が置かれている。数多くの品種を交配し、今までに22品種もの新しい米を生み出してきた。何を隠そう「つや姫」もここから誕生した。「開発から販売までは10年以上かかります。10年後の気候や味の好みを読むのがいちばん難しいですね」と副場長の松田裕之さんがその苦労を教えてくださいました。ハウスの中では開発中の苗たちが、未来に向かって真っすぐに緑の葉を伸ばしていた。

編集・文||松本典子 写真||間真由美
 協力・写真提供||鶴岡市藤島庁舎 産業課



庄内大好き!

日本一!



ズラリと並んだ炊飯器。冬季は1日2回、職員全員でお米の食味試験を実施する。